

高度成長期のテレビドキュメンタリーが描いた「世代間断絶」

—NHK『日本の素顔』『現代の記録』『現代の映像』を対象として—

同志社大学 石岡学

1 目的

本報告の目的は、高度成長期のテレビドキュメンタリーにおいて、青少年を取り巻く「問題」がどのようなものとして理解・解釈されていたのかを明らかにすることである。

高度成長期は、青少年の学び・教育を取り巻く状況が、社会的な格差をともしつさまざまな形で変容を遂げ、問題化した時代である。具体的には、受験競争の激化、進学・就職にともなう人口移動増、非行・少年犯罪の多発などが挙げられる。この時期に爆発的に普及していくテレビというメディアが「問題」の社会的構築に果たした役割は決して小さくなかったと考えられるが、このことを主題とした研究は管見の限り存在しない。

2 方法

そこで本報告は、1957～71年に放送されたドキュメンタリー番組『日本の素顔』（NHK テレビ→NHK 総合、1957～1964年）、『現代の記録』（NHK 教育、1962～1964年）、『現代の映像』（NHK 総合、1964～1971年）を分析対象として、上記課題の解明を行う。これらの中で青少年に焦点を当てた回のうち、アーカイブスでの保存状態が不完全なものを除く30件を直接の研究対象とする。分析方法としては、広義のドキュメント分析を採用する。分析対象が映像資料であることに留意し、言説分析の観点からナレーションや登場人物の発言を分析すると同時に、繰り返し現れる特徴的な構図や『絵』と『声』の拮抗（崔 2015）などにも着目しつつ、「青少年問題」の描写において特徴的に見られたイメージと社会的認識の枠組みを解明する。

3 結果

分析の結果、以下の諸点が明らかとなった。①「問題の温床としての都市」というイメージを背景として、「子どもらしさの喪失」や非行・不良化が繰り返し問題化されていた。その一方、都市部以外の地方が必ずしもユートピア的に描かれていたわけではなく、その「貧しさ」や「後進性」が青少年に対して及ぼす悪影響についての指摘も少なくなかった。②学校に対するイメージとしては、その必要性を無条件に肯定する言明がなされる一方、非行・不良化や受験競争などの問題に対してはその無力さが指摘されるという両義性が見られた。③こうした青少年問題を大人世代との「世代間断絶」の問題と捉えたうえで、それらの発生は「大人社会の歪みの反映」だとする解釈枠組みが、全体を貫く通奏低音として流れていた。

4 結論

「世代間断絶」という捉え方は、激しい社会変動に対する戸惑いが「理解しがたい青少年の言動」という形で投影されたものと見ることができる。「大人社会の歪みの反映」という意味づけは、因果関係を持ち込むことでそれらを「理解可能な問題」に読み換えようとする意図の表れだと言えよう。しかしそれは青少年の主体性を認めようとしない認識枠組みでもあり、「問題」の対極に想定されている「健全な青少年」イメージの空虚さをも意味していた。

※本報告は、「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル」（2016年度第1回）による成果の一部である。

文献

崔銀姫『日本のテレビドキュメンタリーの歴史社会学』（明石書店、2015年）